

体にいいモノ作りを目指して

北川さゆり



はじめに

生物工学会誌の読者のみなさん、こんにちは。「キャリアデザイン」についてのご依頼を受け、学生さんたちの参考になればと思い、僣越ながらお引き受けしました。現在、私は海外駐在中ですが、生物工学会誌は購読し続けており、色々な世代・色々な経歴の方が執筆されているこのキャリアデザインのコーナーを、たいへん興味深く拝読しています。

不二製油でのキャリアパス

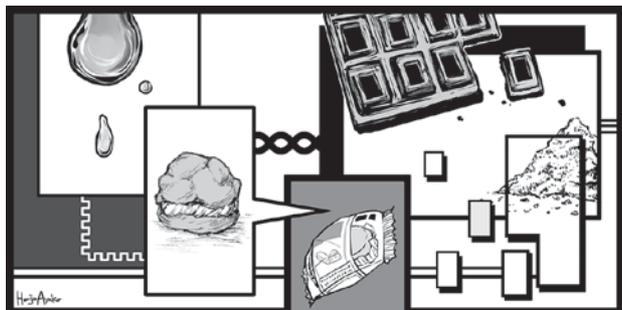
私は、1994年に修士課程を修了した後、「不二製油」という一般の方にはあまり馴染みのない会社に入社し、現在に至ります。当社は本社を南大阪に構え、植物性油脂、業務用チョコレート・カスタードクリーム・チーズフィリングといった製菓製パン材料、大豆たん白素材など、一見、まったく異なるカテゴリーの製品を扱う複数の事業部を有しております。私はこれまで、そのうちのいくつかの事業部門や、事業部とは独立した位置づけにある基礎研究部門に所属しました。事業部門間をまたがる異動の経験は、社内では多い方です。事業部門が変わると扱う製品がまったく異なり、必要とされる専門知識も変わるため、ずっと一つの事業部門で専門性を深めて

いる同僚のことを羨ましく思うこともあります。色々な製品やカテゴリーの異なるユーザーさんに幅広く接することができたり、意外と異なるカテゴリーの専門知識を製品開発に活かすことができたりして、ラッキーだとも思います。

もちろん、同じコース、同じ会社を選んだとしても、同じような処遇になるわけではなく、当社の同期入社メンバーでも三者三様ですが、学生時代の同窓会などで、大きな有名企業に技術者として入社した友達の話を聞くと、事業部門間をまたがるような異動はほとんどないというところが多く、色々な経験ができるという意味では、程よい規模の会社に入社できたのかもしれない。

開発の現場を経験して

入社してから知ったことですが、当時、修士卒の女性社員は私一人でした。前例がなく上司や先輩たちもどう扱っているのかわからない、といった感じだったのでしょう。上司からはっきり、「北川さんの扱いには我々も困ってるんや」と言われたこともあります。そんな中、私は修士卒の男性社員と同じお給料をもらっているのだから、彼らがやっている仕事はやらなければとずいぶん気負っていましたが、今になって、特に体力的な面について、男女の性差を受け入れなければいけないところはあるな、と思います。ラボスケールから現場にスケールアップするときに行うパイロット作業は、食品会社の開発では必須ですが、扱う製品によっては、何十kgもある原料や容器を持ちあげなければいけません。最初の部署の作業はスケールが大きく、パイロット作業をした女性社員は私が初めてで、「第一号が音を上げると、その後の女性社員の芽を摘むことになる」と思い、体力的にきつい作業も音を上げずにやりました。幸い私は大柄な方ですし、工務のおじさんが見かねてウインチをつけてくれたりしたおかげで、なんとか乗り切りましたが、そ



の後、私に比べてずいぶん小柄な修士卒の女性社員がその部署でパイロット作業をすることになって、苦労をしたようです。芽を摘んではいけないと気負っていたことが、逆に後輩を苦しめることになったのかもしれませんが。

「女性」「修士卒」というくくりだけでなく、前例がない、あるいは少ないところに飛び込むことは、確かにリスクや苦労はあると思いますが、世の中どんどん多様化してきていますし、そもそも、「男性」「女性」などといったくくりを作って一まとめにすること自体ナンセンスかもしれません。本人も周りも個々の差を認め、お互いの長所を尊重し合うことが大事だと思います。

縁あって博士号取得

さて、大豆たん白素材や業務用のチーズフィリングなどの事業部門の開発を経て、つくばにある基礎研究部門へ異動になりました。当時、第三のビールに、大豆たん白素材の一つである大豆ペプチドが使用されており、基礎研究部門での最初のミッションは、大豆ペプチドがビール醸造にどのようなメリットをもたらすのかを研究することでした。前職のチーズフィリングの開発で少し発酵を用いることがありましたが、勉強のため派遣してもらった酒類総合研究所で、醸造や発酵を学ぶことができ、なんと奥深くて面白い世界なのだろうと思いました。

大豆ペプチドと醸造に関して得た知見を論文にして修士時代の担当教官の先生にお送りしたところ、どんどん論文を書いて博士号を取りなさいと言って頂きました。それがきっかけで、博士号取得を意識するようになったのですが、企業で基礎研究を論文化するには色々な制約があり、一報だけ論文にした後、なかなか論文文化に至らないうちに、担当教官の先生が突然のご病気で亡くなってしまいました。お亡くなりになる直前に論文博士を取得した研究室の後輩から、「先生が、北川さんもそのうち博士を取るかもしれないと楽しみにしておられましたよ」と言われ、心残りに思っていたところ、なんとか論文文化の目途が立ち、それと同時に、「縁があって」筑波大学の社会人博士課程に入学、2013年3月に博士号を取得することができました。「縁があって」というのは、同じ大豆ペプチドの研究でお世話になった筑波大学の先生から、「こういうコースもあるので興味のある人に紹介してください」と社会人博士課程の募集要項を頂いたことがあったのですが、部署のメンバーに紹介した後、さほど意識することなくそのままにしていました。ところが、論文文化の決め手になる実験結果が出た翌日に、机

を整理していたままたまその募集要項を見つけ、応募締め切りが2週間後だったので、かなりギリギリのタイミングで申し込みをしました。無事申込み間に合い、入試を受けた直後に、基礎研究部門から再び大阪の開発部門に異動になりました。色々なことのタイミングが少しでもずれていたら、博士取得はできていなかったと思います。よく言えば、タイミングを逃さなかった、悪く言えば、行き当たりばったりの結果です。もちろん、指導教官の先生・ビール醸造に関する研究でご指導頂いた先生のご指導のおかげでもありますし、同僚の協力もありました。また、当社は社会人博士取得に前向きな会社であり、基礎研究部門に異動になった時も、研究本部長にどんどん研究を進めて博士号を取りなさいと言われていました。そういった環境がなければ、絶対に取得できていなかったと思いますので、本当に周りの方々と運と縁に恵まれた結果だと思います。

思いがけず海外へ

博士取得から一年ほど経った頃、研究本部長から電話があり、アメリカ赴任を言い渡されました。海外では博士号がモノを言うし、せっかく取得したのだから、活かせるところで頑張りたい、と。そんなわけで、2014年5月から、ジョージア州サバンナという地方都市にあるグループ会社に出向しています。

当社は、アジア圏を中心に、世界の20か所にグループ会社を持ちますが、「語学が達者だから」海外赴任を言い渡されるわけではないようで、私もお多分にもれずコミュニケーションに苦勞しています。海外での仕事は、言葉のせいだけでなく、仕事に対する考え方や文化の違いもあり、想像をはるかに超えてトラブルが多く、毎日が驚きとストレスの連続です。が、早く日本に帰りたいとはまったく思いません。これまで知らなかった文化や社会に触れ、日本が世界基準ではないことを身を持って実感します。と同時に、日本のよいところ、よくないところも痛感できます。会社から海外赴任の辞令を受けるまでは、格段希望していたわけでもありませんでしたが、長い会社生活のうち、特にグローバル企業を目指す当社に属する中、海外赴任が経験できて本当によかったと思います。欲を言えば、もう少し若い時に経験したかったと思いますが、この時期での赴任だからこそできることや、感じられることがあるのかもしれませんが。

シュウカツに思うこと

ただいま2015年3月です。日本ではシュウカツの真っ

最中だと思えます。私が新卒で当社に入社した頃は、どんどん景気が悪くなって、新規採用人数が急激に減っている頃でしたが、まだ研究室の教授の紹介が後押ししてくれる時代でした。現在、ありがたいことに当社はたくさんの学生さんに応募して頂き、我々のような中堅社員が技術系の応募学生さんの採用面接などの手伝いをするがありますが、今のシュウカツは本当に大変そうで、そこまで苦勞せず職を得た者としては申し訳ない気分になります。

面接で、グループ10人から3人を選ぶように言われて、10人のうちほとんどが、明らかに入社した頃の自分より優秀な子ばかりなのに、7人はお断りしなければならないといったこともありました。シュウカツを控えた学生さんには、「採用は、そのときの景気とか、運とか縁とかいった、自分でコントロールできないものに大きく左右されているので、面接で落とされても自分を責めたり悩みすぎたりしないで」と言いたいです。ただ、幾多の試験や面接を経て入社してくれた新入社員は、当社によほど縁があったのだと思えます。自分が面接した学生さんが入社してくれた経験は数えるほどしかありませんが、「よく来てくれた」ととても嬉しい気分になります。そのうち、初めて入社してきてくれたメンバーとは、まったく違う部署にいても社内のイベントと一緒に応募したり、異動した先で一緒に部署になったりと、今でもなにかと縁があります。

本誌を読まれている学生さんが、いい縁で結ばれている会社に入社できること、当社にもそういった新入社員さんが入社してきてくれることを祈ります。

終わりに

入社当時、きついパイロット作業をしながら、よく「何のために仕事をしているんだろう」と考えました。そして、漠然と「体にいいモノを作りたい」と思って農学、食品工学系の学科に進み、食品会社への入社を希望したのだった、と思い至りました。本来は、会社を選ぶ前に

しっかり考えるべきことですが、実は、入社前にはそこまで深く働く意義を考えず、入社して初めて本気で考えた気がします。やがて、チーズフィリングなどの嗜好品の開発をする部署に異動になり、「体にいいモノが作りたいのに」とがっかりしたのですが、そのときに、ある人から「でも、嗜好品は心にいい、おいしいものを食べればみんなハッピーになれますよね」と言われ、なるほど、と思い直しました。当社の企業理念は、「[食]の創造を通して、健康で豊かな生活に貢献します。」であり、入社前に漠然としか考えなかった割に、自分がやりたかったことと方向性が一致していてラッキーだなと思います。

「何のために働くか」は、人によって違うと思います。「たくさんお金を儲けたい」「安定して長く勤めたい」「人助けがしたい」……色々な目標があると思いますが、自分の目標に一番近づくには、どの道を選べば実現の可能性が高いか？私は漠然としか考えなかった割に、方向性が一致した道に進めてラッキーでしたが、学生の皆さんには、ぜひとも選ぶ前に考えることをお勧めします。

(イラスト：本條 綾子)



<略歴> 1992年 筑波大学第二学群農林学類卒業、1994年 京都大学農学研究科食品工学専攻修了。1994年 不二製油株式会社入社。2014年よりFuji Vegetable Oil, Inc. 出向。
<学位> 博士(生物工学)(2013年3月筑波大学生命環境科学研究科課程博士)
<趣味> バレーボール